

卒業論文作成の手引き

青山学院大学文学部日本文学科

二〇一四年三月補訂

一 卒業論文提出までの手順と日程

一―一 卒業論文題目届

五月三十日(金)午後四時までに、「卒業論文題目届」を日本文学科合同研究室(総研ビル一〇階)に提出する。

規定の用紙に題目を記入し、指導教員に確認の印鑑を捺印してもらってから提出する。そのため、少なくとも提出期限の一週間前までには日本文学科合同研究室で用紙をもらい、指導教員の日程を確認して、捺印してもらおう時間を確保すること。

用紙の配布は五月初めから行っているため、なるべく早めに日本文学科合同研究室に取りに来ることが望ましい。

なお、提出についても、教員の印鑑が捺印されていれば、日本文学科合同研究室で随時受け付けている。

この時点で提出した題目は、後で変更不可能なので、指導教員と相談の上、よく考えて決定すること。なお、副題(サブタイトル)を後から付加することは自由である。

一―二 卒業論文提出

本年度は十二月十五日(月)・十六日(火)が提出日である。

指定された時刻までに、教務課に必ず提出すること。日時は厳守され、遅刻等はいかなる理由があっても絶対に許されないので注意すること。

卒業論文本体と合せて、卒業論文要旨(様式は後述)も別綴じにして提出する必要があるため、その分の時間の余裕も考えておくこと。提出場所・時間などの詳細は後日、ポータルで伝えるとともに掲示するので、必ず注意すること。

二 「卒業論文」および「卒業論文要旨」の体裁

二―一 卒業論文

- ①書式は特に定めず、パソコンによるプリントアウト、手書きのどちらでもよい。
- ②用紙のサイズはA4を基準とし、手書きの場合には、四〇〇字詰原稿用紙を用いることとする。
- ③分量は最低でも四〇〇字詰原稿用紙五〇枚相当(スペースを含め二万字。ただしルビは

字数に含まない)を越えていなければならない。

④その他、詳しいことは、指導教員の指示によく従うこと。

二―二 卒業論文要旨

卒業論文とは別に、要旨を提出する。

パソコンによるプリントアウト、手書きのどちらでもよい。分量は一〇〇〇字程度で、サイズはB5とする。手書きの場合は、四〇〇字詰原稿用紙を用いることとする。

B4判の原稿用紙を用いた場合は、縦書きにし、半分に折ってホチキスなどで綴じる。

なお、詳細については、日本文学科合同研究室に置かれた見本で必ず確認すること。

要旨が添えられていない卒業論文は受け付けない。なお、この要旨は後に合綴して日本文学科合同研究室に保存し公開する。

二―三 提出時の注意

卒業論文は、卒業論文用表紙を付け、バラバラにならないように綴じること。綴じ方は縦書き右綴じが原則であるが、指導教員によって方針が異なるので、綴じる前に必ず指導を仰ぐこと。

要旨には白紙の表紙をつける。

所定のレポート提出票に必要な事項を記入し、卒業論文本体と要旨それぞれの表紙に貼付して提出すること(日本文学科合同研究室の見本に従うこと)。

三 卒業論文のまとめ方

三―一 「論文」とは

「論文」は、自分自身でテーマを発見し、先行研究を手がかりとしながらも、さらに自身自身の方法を編み出して、自分なりの解答を発見し、他者にも十分理解できるように提示するものである。

三―二 「論文」の構成要素

- (1) 自分自身のテーマ(大きなテーマと、そのための小テーマ)
- (2) そのテーマに関する先行研究のまとめ(何がどこまで明らかになっているか。研究史が見逃している問題は何か)
- (3) 先行研究に対する、自分の研究の位置付け
- (4) 自分の結論を出すための方法と視点(アイディア)
- (5) 自分自身による調査と論証と考察
- (6) 自分自身の結論

三―三 調査・利用する資料について

- ・ 第一次資料Ⅱ 研究対象とする作品・資料から採取したデータ
 - ・ 第二次資料Ⅱ 研究対象とする作品・資料に関わる作品・資料から採取したデータ
 - ・ 第三次資料Ⅱ 研究テーマに関する先行研究（研究書・論文・ウェブサイトなど）
- ※資料の違いを十分に意識し、第一次資料・第二次資料をベースに論を組み立てる。

三―四 論文の構成

I 序論

- ① テーマについての自分自身の問題関心、方法、視点の提示
 - ② 参考研究の整理と問題点の指摘
 - ③ 先行研究の問題点を踏まえて、より明確に論文の方向を提示する
- #### II 本論
- ④ 分析と論証

※「章」と「節」に分けて記述する。論旨の展開に最も適切な組み立て方を工夫する。

III 結論

- ⑤ 自分自身の結論の提示
- ⑥ 残された研究課題や今後の研究テーマについて言及、および謝辞

三―五 論文の具体的な形式

- 1 扉 論文題目と氏名を書く。裏は白紙のままよい。

- 2 目次 章や節の名称とページを書く。

※第何章、あるいは第何節が何ページからかを、必ず記すこと

- 3 凡例 論文全体にわたって使用した作品の本文や、資料が何によるものかを記す(例えば、「新編日本古典文学全集」〈小学館〉の本文に拠ったことを明記する)

- 4 序(序章／はじめに／はしがき)

- 5 第一章(必ず章のタイトルを入れる) ※一章は二〇枚程度

一 (または第一節) 「できるだけ節のタイトルを入れる」

二 (または第二節)

三 (または第三節)

……

第二章(必ず章のタイトルを入れる)

一 (または第一節)

二 (または第二節)

……

……

※「注」は①各ページの右端(縦書きの場合) または下(横書きの場合)、

- ②各章の末尾、③本論の最尾、のどこかに記す。指導教員の指示に従う。
- 6 跋（終章／おわりに／あとがき） 論文全体を要約し、今後の課題を記す。および謝辞を記す。
- 7 資料 ※特に分量の多い写真・図・表・統計データなどを論文に添える場合、ここに一括する。
- 8 参考文献 卒業論文を書くために参考にした文献（本論で引用しなかったものも含めて）を全て挙げる。※著者別五十音順など
- 9 論文要旨 別記の体裁（二―二）で別綴じとする。

三―六 原稿の書き方

【章・節の見出しと本文の書き出し】

- ・「章」は二行目に、上を二文字程度あけて「第〇章」とし、次に一字あけて「章」のタイトルを書く。
- ・「節」は「章」の見出しから一行おいて、「章」より一字下げにして、「〇」または「第〇節」と書き、次に一字あけて「節」のタイトルを書く。
- ・本文は「節」から一行おいて書き出す。適宜段落を分け、各段落の書き出しは一字下げ。

【文体】

- ・文体は「である」体で統一する。
- ・一文、一段落の長さは、短すぎず、長すぎずに（一段落における主張は一つ）。

【句読点】

- ・句読点・括弧（「・『』・（・〈・〉」など）等は一字分とする。ただし、符合が二つ重なる場合は、合せて一字分とする。例。「（）」。
- ・次の行の初めに句読点が来てしまう時は、前の行の末尾に記す。

【引用文】

- ・短い文や語句を引用する場合は「」で囲んで、論文の本文に入れる。
- ・長い引用は、改行して、二字下げにして記す。
- ・出典を凡例や注などで明らかにしておく。
- ・引用文の仮名遣いなどもすべて原文のままとする。原文に誤記や誤植のあると思われる時には、その部分の右傍に「ママ」と小書きしておく。
- ・引用文に、卒業論文の筆写が傍点・傍線・注記などを付けた時は、「傍点、引用者」などと（ ）に入れて、引用文末などに明記する。
- ・長い詩を論文の本文の中で引用する時は、「秋の日の／ヴィオロンノ／ためいきの／身にしみて／ひたぶるに／うら悲し。」のように、原文の改行を「／」で示す。

【注】

- ・注では、①引用した作品・資料、また引用文献の書誌情報を記す、②本文の中では展開しにくい、省略することのできない問題について論じる。

- ・注は、本文の右傍（原稿用紙の場合）、直後（パソコンの場合）に、「(1)」「(2)」…、や「注1」「注2」…と注番号を記し、その内容は本論の末尾などにまとめて記す。
- ・注番号のスタイルは統一すること。
- ・書誌情報の記し方は以下

〔本〕 著者名『書名』章・節またはページ、発行所、発行年

〔論文集の論文〕著者名「論文名」（副題まで）編者名『書名』発行所、発行年

〔雑誌論文〕 著者名「論文名（副題まで）」『雑誌名』巻号、発行年月

《注意事項》

- ・誤字脱字に注意すること。卒業論文の原稿が完成したら、提出前に必ず誤字脱字の確認をするように。
- ・作品のあらすじの説明や、他人の説の引用と紹介だけでは、論文ではない。先行研究を踏まえながら、自分自身の方法によって、自分の考えを示すものが論文である。
- ・先行研究を利用する場合、どこまでが先行研究の説で、どこからが自分の考えであるかをはっきりと区別して記述すること。
- ・先行研究を引用する場合、それが誰の説かを必ず明記する。「〜とされている」「〜であるようだ」という出所の曖昧な引用をしてはならない。
- ・文学作品については、安心して利用できる本文を必ず用いること。特に近代文学の作品については、文庫本ではなく、しっかりと校訂された個人全集や文学全集を利用する。
- ・作品や資料（第一次資料・第二次資料）については、なるべく原文を引用しながら論を進める。
- ・「卒業論文要旨」には、卒業論文で得た結論を具体的に記す（各章ごとに記すよい）。「〜について研究した」「〜について考察した」と漠然と研究対象を記すだけで終わらないようにする。
- ・ワープロやパソコンを利用する場合には、提出直前のインク切れや用紙切れに注意すること。データのバックアップも必ずすること。大学のプリンタを利用する場合は、提出期限日頃は込み合うので、事前に下見し、余裕をもってプリントアウトすること。
- ・その他不明な点は日本文学科合同研究室に問い合わせること（外線 03-3409-7917 メールアドレス jpn@cl.aoyama.ac.jp）

（参考例）

第六章 歌垣の意義とその歴史

第一節 歌垣の意義

「歌垣」とは何かという問題は、分かりきったことのようにでありながら、学者によって

理解の仕方がかなり違っており、そのために起源に関する説もいろいろである。これはなぜかという点、古代文献における歌垣の記述が簡略で、その具体的な姿が把握しにくいこととともに、歌垣自体が行事の形態、内容の面でも、機能の面でも、時代と共に変化しており、歌垣の遺風と見られる今日の民俗も、地方によってかなり様相を異にしているためである。

従来歌垣の理解の仕方を起源論を含めて一応整理してみると、第一は性的解放ないし婚約という面において歌垣を理解するもので、これに原始的乱婚の遺風とする説(注1)、神判婚または縁結びの行事とする説(注2)がある。第二は異なる地域の者の参加による異族結婚、異民族文化の接触の行事と見る説(注3)、第三は農耕予祝を本質とする季節祭とする説(注4)である。そのほかに成年式と関係があるとする説(注5)、年齢別集団の祭とする説(注6)などもある。これらの諸説は、歌垣の機能や形態のある一面、あるいはある時代、ある地方におけるあり方を指摘したものとして、それぞれ正しい説であり、今日のがわが国や外国の民俗の例をあげて、それぞれの説を裏づけることもできるであろう。

しかしそのことは、歌垣がそれほど多面的な性格を持つ行事であり、また時代的・地方的に、かなり変化していることを物語るもので、従って歌垣の本質とか起源の問題は、その行われる時期、場所、参加者などの形態的な面、行事の具体的な内容と機能ないし目的などのあらゆる面について、それが時代とともにどのように変化して行ったかを歴史的に明らかにした上で取り上げられるべきものであろう。

そこでまず歌垣の概念を明らかにするために、古代の文献の中で「歌垣」または「カガヒ」と呼ばれているものについて、行事の形式・内容・機能を検討するとともに、今日の民俗との比較を試みてみよう。

登筑波嶺為嬬歌会日作歌

驚の住む 筑波の山の 裳羽服津の 其の津の上に 率ひて 未通女壮士の 行き集
ひ かがふ嬬歌に 他妻の 吾も交らむ 吾が妻に 人も言問へ 此の山を うしは
く神の 昔より 禁めぬ行事ぞ 今日のみは めぐしもな見そ 事も咎むな

高橋虫麻呂歌集(『万葉集』巻九・一七五九)

記述が簡単で詳しい内容は分からないが、この筑波山の歌垣については、『常陸風土記』にこの行事の内容がかなり詳しく記されている。

注

(注1) 土居光知『文学序説(再訂版)』八一―一二頁、岩波書店、一九五〇。

(注2) 原田敏明「Sanctuaryより見たる歌垣」『日本古代宗教』中央公論社、一九四三。

(注3) 高野辰之『日本歌謡史』九―九二頁、春秋社、一九二六、一九三八(新訂増補)。

(注4) 木本通房「歌垣の歌謡について」『国語と国文学』第13巻第12号、一九三八―

二。倉野憲司「歌垣の再検討」『文学』第8巻第5号、一九四〇―五。

(*以下略) 〔土橋寛『古代歌謡と儀礼の研究』(岩波書店、一九六五)による〕